

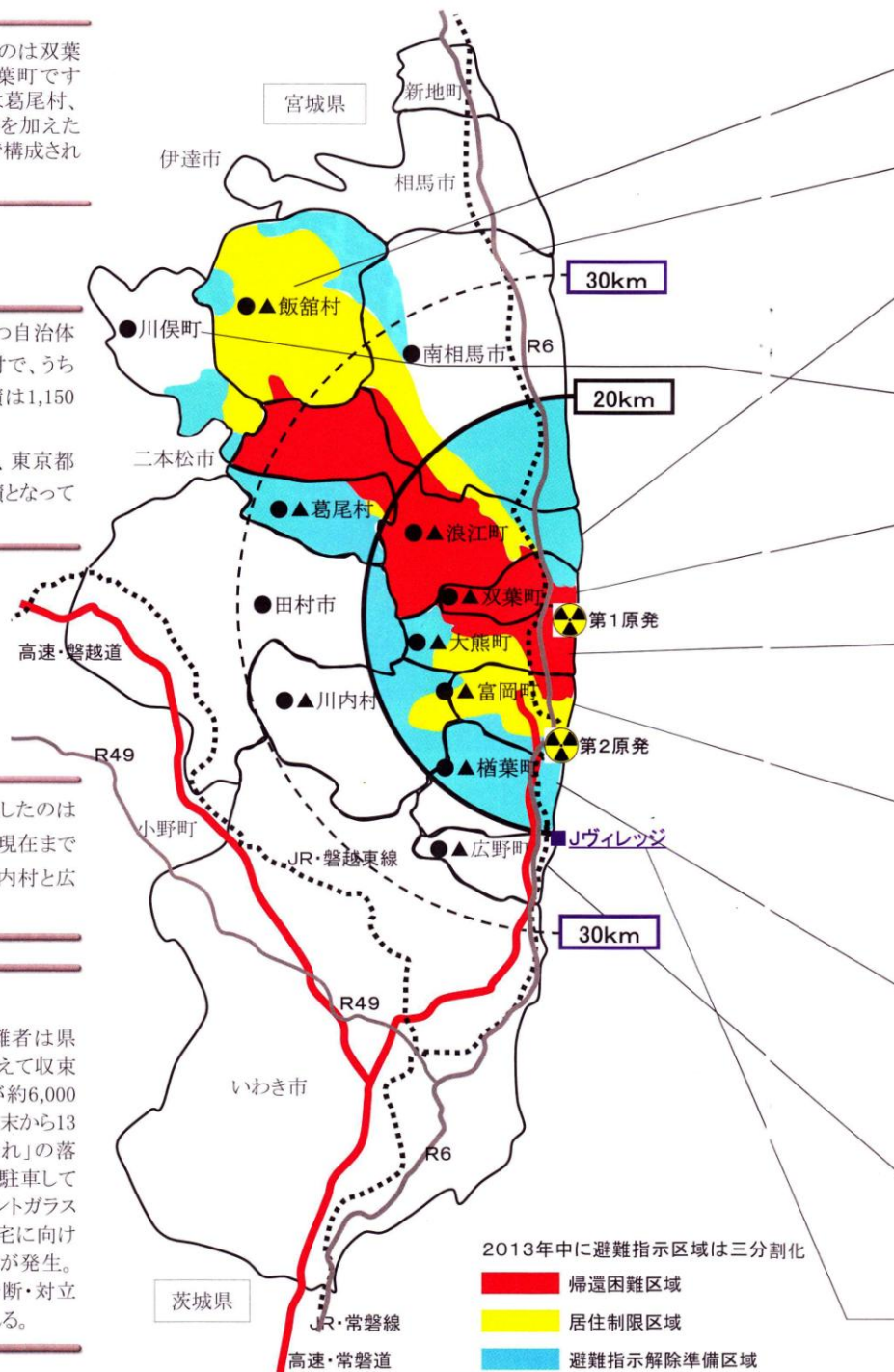
原発10基が立地しているのは双葉町、大熊町、富岡町、楢葉町ですが、立地地域全体としては葛尾村、浪江町、川内村、広野町を加えた双葉郡と呼ばれる8町村で構成されている。

避難指示が出た区域をもつ自治体は●印の付いた12市町村で、うち人が住んでいない総面積は1,150平方Km。その広さは大阪府の6割、東京都の5割に当たる広大な面積となっている。

役場を他の市町村に移転したのは▲印の付いた9町村。うち現在まで移転先から戻ったのは川内村と広野町のみ。

いわき市で起こったこと

現在いわき市に住む避難者は県内最多の2万4,000人、加えて収束や除染の作業に働く人が約6,000人と見られている。2012年末から13年夏にかけて「避難者帰れ」の落書き事件、仮設住宅内に駐車していた自家用車7台のフロントガラスが割られる事件、仮設住宅に向けた花火打ち上げ事件などが発生。背景には東電と政府の分断・対立の持ち込みがあるとみられる。



- 飯館村** 第一原発から40キロ以上も離れ、原発事故とは無縁と見られていた村が全村民避難となった。「日本で最も美しい村」連合加盟村であることや「まていな村づくり」(飯館流スローライフ)などで有名。役場を福島市に移転。
- 南相馬市** 人口6万4000人。市全体が、20km圏内の警戒区域・30km圏内の緊急時避難準備区域・30km圏外の三つに区分された町。津波による被害も甚大。
- 浪江町** 双葉郡内でもっとも人口の多い2万人。全町民避難。放射能の流れが国により隠されたために町長はじめ多くの町民が町内で最も汚染された西部の津島地区に避難。町長は「国を殺人罪で訴えたいほど」と語った。請戸地区など海岸線の集落は津波で全滅。役場を二本松市に移転。
- 川俣町** 飯館村とともに原発事故とは無縁とされていた町。南東部の山木屋地区が避難を強いられた。避難者訴訟の第2陣として裁判の闘いに加わった。
- 双葉町 東電第一原発立地町。** 町内にあるアーチには「原子力明るい未来のエネルギー」と書かれたまま放置されている。立地町の中では最初に財政が困難になり、町長の歳費はゼロにしたほど。町は1991年以来、7・8号機の増設を求めている。役場を埼玉県加須市に移転、のちにいわき市に。
- 大熊町 東電第一原発立地町。** 町内にあったオフサイトセンター(事故時の対策拠点)は地震の被害と放射能によって全く機能せず、70キロ離れた福島市に移転してしまった。役場を会津若松市に移転。
- 富岡町 東電第二原発立地町。** 町の北部で国道6号線が封鎖されている。除染はこれからで「3年間時計が止まった町」となっている。地震と津波の被害がそのままとなり、イノブタ(イノシシとブタの交配)が街の中にまで出没。桜並木で有名な夜(よ)の森駅近くは帰還困難区域が道路一本で区切られている。2014年1月より除染が開始されている。
- 楢葉(ならば)町 東電第二原発立地町。** 「除染の町」の様子が見られる。2012年～13年にかけて一斉に除染が行われ、町内には放射能汚染物を入れたフレコンバック(フレキシブルコンテナバック)が山積みされた「仮置き場」が見える。町内に常磐線の駅が二つあり、北の竜田駅まで2014年4月から電車が通るようになる。町は4月に帰還時期を発表する予定。
- 広野町** 事故直後町長が町民に避難を呼びかけた。役場をいわき市に移転。2011年8月に政府は「緊急時避難準備区域」に指定し、2012年4月町長は役場を元に戻し早期帰還を呼びかけた。しかし、それから2年近く経っても人口の2割しか戻っていない。小中学生はいわき市の仮設や借り上げ住宅から町営バスで通学。東電広野火力発電所があり、最近、東電は増設計画を発表した。
- Jヴィレッジ(サッカー練習場)** 1991年双葉町議会が第一原発の7・8号機の増設を求める決議をあげると、94年に東電は130億円かけてサッカー練習場を建設し、福島県にプレゼントする計画を発表。130億円は電気料金に上乗せされることが当時の県議会で明らかにされた。トルシェ・岡田両監督時代には日本チームの練習場にもなっていた。事故発生直後から事故収束に働く労働者の集結センターとなっている。2013年には東電復興本社も入った。